

老年論

On the Old Age

岡崎 強

Tsuyoshi Okazaki

〈摘要〉

ポーヴォワールの老いについては、『老い』の著書を要約する形で、彼女の老いに対する考え方を述べた。

死生観については、わが国の死生観を「無常」の思想から考えてみた。

〈キーワード〉 老人の境涯 無常

I. ポーヴォワールの「老い」について

① 未開社会から近世までの社会における老いの概念について、ポーヴォワールは次のように述べている。「未開」人の社会では、老人たちがまだ頭脳が明晰で、身体が頑健である限り、彼らを尊敬するが、老いぼれて耄碌すると厄介払いする。また、彼らの経験や文化的寄与が社会に認められると、老人は尊敬され、そうでないと厄介払いされた。

古代エジプトからルネサンスに至るまで、老いは人生の冬であり、文芸作品を見ると、老人は表に出ず、隠れた存在であった。

18世紀において、上昇するブルジョワジーによって、人道主義的な道徳が表明され、幼児や老人をいたわった。しかし、ダランベールは懐疑的であった。

ポーヴォワールは次のように言う。「19世紀において、搾取された老人たちの境涯が少なくともある程度まで明らかにされたという事実によって、彼の場合と特権的老人の境遇との対照が、他のいかなる時期におけるよりも顕著となる」と。⁽¹⁾

そして、ポーヴォワールの老いに関する考察は文明観に及ぶ。「我々に知られているすべての文明は、搾取階級と非搾取階級の対立によって特徴づけられている。それ故、老いという語は、人がそのいずれを考慮するかによって、深く異なる二種類の現実を意味するのだ」と述べる。⁽²⁾

支配階級のイデオロギーは、自己の行為を正当化することを目的とする。この階級が老齢のものに支配あるいは影響されている時は、老齢に対して価値を与える。けれども、役

に立たず、邪魔になった老人たちの境涯は、未開社会における彼らの場合に似ていた。多くの場合、彼らはなおざりにされ、施設に遺棄された。

世代間の相克にもまして、階級間の闘争が老いの概念に「一方では敬うべきものとし、他方では軽蔑すべきものとする、というような」その矛盾する観念の併立をもたらしたのである。⁽³⁾

② 現代社会での老いと老いの発見の中で、ボーヴォワールは支配階級の優位性に言及する。

「高齢の人々の社会的処遇を決定するのは支配階級であるが、しかし、現役の大衆全体がこれに共謀しているのだ」という。⁽⁴⁾

雇主たちの労働者観として、労働者は50歳で老人になり始めるといい、新しい状況に適応しえないという。「この豊かな社会は豊穡さの果実を彼らには拒否する。この社会は彼らに『かつかつの余命』を与えるだけで、それ以上は何も与えない。」

そして、老人の自殺と障害に関して、次のようにいう。老人たちの多数は、今の状況に耐えがたく感じ、「生きる責苦」よりも死を選ぶ。グリュールの『老年における自殺』を引用し、「自殺の要因は、心身の衰退、孤独、無為、不適應、不治の病気、といった社会的及び心理的要因である」ことを強調している。⁽⁵⁾ さらに、高齢者の障害は、社会的境涯が悲惨でなければ、回避できたとし、バステードの説を引用する。「老衰は果たして老化の結果であろうか、むしろ、老人たちを打ち棄ててかえりみない社会の人工的産物なのではないか。」認知症、寝たきりなどの状態しかり、これらは社会の側に問題があるのだ。

③ 時間、活動、歴史の中で、ボーヴォワールは人間の発達と人間の未来について、重要なことを述べている。「不断の進歩の最終段階である老年は、人間存在の完成の頂点である、ということになる。しかし、人生はこのように展開するのではない。我々の進み方は確実な進歩でなく、モンテーニュのいう、不安定な歩行なのである。⁽⁶⁾」我々の生涯を顧みれば、老年期は完成の時であるが、規則通りにいかないのが人生ではないかと言っている。

そして、地球の未来について、その消滅を肯定する人に失望するといいい、「無限を想定できないが、有限性を受託しない。私は自分の人生が刻印されている人類の冒険が無限に続くことを必要とし、若者の中に我々の種が継続すること、人類がより良い時代を持つこと、この希望がなければ、私の向かう老いは、私にはまったく耐え難い」と述べる。⁽⁷⁾

核の脅威、宇宙での戦闘行為、そういったことを見据えたうえでのボーヴォワールの希望を我々は深く胸に刻んで、保持していく必要がある。

④ 老いと日常生活において、高齢は、「播いたものを収穫する」時期と、フォントネルはいった。しかし、ボーヴォワールは否定する。享受できる環境ではないし、楽しむ何らの手段もない、と手厳しく拒否した。そのような状況ではなく、老人にとって、これ以上、生きながらえることは、無益な試練だ。それは彼らを蝕む倦怠と苦い屈辱的な無益感、そ

して孤独感、と不可欠に混じりあっているから、という。

ボーヴォワールの老年期に関するネガティブな視点として、次のことが考えられる。老人の最大の困難の一つは、まさに自己の同一感を保つことが困難な点にある、そして、自分の身分と社会的役割を失っており、自分のことを定義しえず、自分が何者であるかもわからない。「同一化の危機」が克服されない限り、老人は途方にくれるのである。

アイデンティティの拡散と呼ばれるもので、自己存在のよって立つ基盤が定まらないのである。

⑤ 最後の章の「いくつかの老年の例」で、ボーヴォワールは老いの真相を明らかにしようとする。老いをパロディーにしないためには、未来への情熱を持つこと、人生を意義あるものとするためには、目的を持つことだという。しかし、それは特権者しか得られないもので、定年退職者には望むべくもない。それは体制のしわざなのだ、ボーヴォワールは述べる。

「これまで搾取され、自己疎外された人々は、体力がなくなると、必然的に『廃品』となり、『屑』となるのだ。その悲惨を糊塗するための救済策はどれもみなとるに足らないのだ。どれ一つとして、人々が一生の間その犠牲となった系統立った破壊を償うことはできない。」⁽⁸⁾

長期にわたる労働により、労働者は知らず知らずのうちに、自身の肉体を消耗し、定年に至るや価値なきものとして追われてしまう。培われた労働が人間的価値を向上させるのではなく、かえって低下させる結果となってしまった。そして、高齢期における自殺、障害、貧窮などの問題の本質は、ボーヴォワールに言わせると、「老年期において人間が一個の人間であり続けるためには、社会はいかなるものであるべきか、ということであろう」という。

即ち、社会のあり方が問題なのであるという。そして、答えは簡単なのだ。それは次のようである、「彼がそれまでの生涯を通じて常に人間として扱われていたのでなければならぬということだ。現役でなくなった構成員をどう処遇するかによって、社会はその真の相貌をさらけ出す。」⁽⁹⁾資本主義社会における資本家と労働者との関係が問われる。ボーヴォワールの見解は厳しい。「即ち、社会はそれまでも常に彼らを資材とみなしてきたのだ。社会にとってはただ利得だけが大切なのであり、その『人道主義』なるものは単なるうわべに過ぎないことを白状する。」

生産関係の中で、労働者は生産手段の一つとみなされ、利潤を生み出せるか否かが問題なのだという。そして、社会の組織、構造を作り換えるべきでないかと提言する。「老人の境涯を受託しうるとするためには、人間全体をつくり直さねばならず、人間相互のすべての関係を根本的につくり変えねばならない。人間は彼の人生の最後の時期を素手で、そして孤独のうちに迎えるべきものではないはずだ。」⁽¹⁰⁾

ボーヴォワールはどの社会体制が望ましかについて、明確に供述しないが、ただ次のよ

うな指摘をしている。「彼自身の生活と同じように日ごとのそして本質的な一つの共同生活に参加するのであるならば、彼はけっして流涕の境涯を経験することはないであろう」と。

そして、最後に次のように述べる。「老人たちの境涯がどのようなものであるかを理解したとき、人はもはや年金の増額とか衛生的な住居、組織だてられた閑暇などといった、現状より少し気前の良い『老年対策』を要求するだけで満足することはできないだろう。それは体制全体にかかわることであり、人生を変えること、以外にはないのだ。」⁽¹¹⁾

即ち老年はすべての人間が人間として生き続けること、すなわち一人の人格者として、一人の尊厳を持った個人として、全人的に生活できる存在として、生きる権限を持った存在として、その生命を全うできるものとして、社会が責任を持つべきであるのだ。そのために社会のあり方が根本的に問われるのである。

ボーヴォワールにとって、労働者は生存をするために労働力を提供し、生産を価値あらしめる重要な役割を持っている。雇われているという従属的な立場にいても、生産の場においては主体的な存在として、生産を維持するのである。そうすれば、生産活動を担う主体たる労働者は自身の労働力再生産は当然として、それぞれの個性を持った人格者として尊重されねばならないのである。ボーヴォワールの言った人間として扱われていることが必須のことなのだ。

しかし、ボーヴォワールの見た労働者はそれとは違う存在であり、激しい憤りを抱いた。生産関係のみならず、社会の体制を変革する以外に道はないと決意した。

さて、ボーヴォワールにとっての老いとは何であったのか。それは特別な状態を意味するものではなく、幼児、児童、青年、壮年、老年に至る一連のプロセスの中で、人間存在の完成期といわれる老年期において、充実した幸福な晩年を過ごすことができる時期であり、独自の個性と生活環境を創造することができる人生を意味するのである。「個人は年齢によってひそかに弱りはするが、目立つほどの能力や価値の低下はみられず、ある日、うち勝ちえない病気にかかってたおれるだろう。しかし、彼は失墜を身にこうむることなく死ぬのだ。すなわち、青年期や壮年期とは異なるが、固有の均衡をもち、個人に広範囲の可能性をゆるす人生の一時期となるであろう」⁽¹²⁾とボーヴォワールは述べる。そして、われわれはそのような状態からはほど遠い。社会は、彼が収益をもたらすかぎりにおいてしか個人のことは気にかけない。と言う。⁽¹³⁾

ボーヴォワールにとっては、本来の老いの姿を取り戻すために、現在の資本主義的な経済社会を変革することが必要であった。

II. 死生観について

老境になれば人は死を考えるであろう。永遠の生はありえないとすれば、おのずと生の終焉が訪れる。死の意味を考えずとも、生は終わる。

生きるとは、自分に与えられた生命を維持し、それを輝かすことであろう。その輝きの明暗がどうであれ、生命そのものはどの人のものであれ、まったく同じ価値を持つものだ。

生を考えることは、死を考えることと同じであり、逆も真なりである。死生観を考えることは自分の生、自分の生命を考えることとなる。ここでは一つの手がかりとして、霜山徳爾氏のいう「無常」の思想について考えてみよう。霜山氏は、日本の老年者の死生観を考察し、次のように述べる。「本邦の文化的風土からそれに大きく影響しているのはやはり『無常』の思想であり、それと重なり合う『浄土』の観念である。」そして「個人主義的な自我の確立やそれによる社会的、思想的孤立よりも、農耕民族的な自然との親和性、一体感がつよい」という。⁽¹⁴⁾

周知の次の文を見てみよう。

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず（方丈記）

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす（平家物語）

無常観の迫る文言ではないか。ただ、変転きわまりない人生、社会、周りの万物、などを哀感を持って受け止めるのか、それとも無常変易に身を任せ、万物との一体感を感得するのかで、死に対峙する己の死生観が大きく異なってくるであろう。

例えば、

をりふしの移りかはるこそ、ものごとにあはれなれ（第九段）

兼好の『徒然草』の一節であるが、すべては移りゆくものであるとして、変化を積極的に肯定しようとする兼好の鋭い現実認識である。

この世が無常変易の境である限り、この世にあるものは、すべて無常変易の存在であることをまぬかれない。「われ」もまたその埒外ではない。⁽¹⁵⁾

兼好の死生観である。

良寛の辞世の句として、次の歌が伝えられている。

かたみとて、何か残さむ 春は花 山ほととぎす 秋はもみぢ葉

裏をみせ 表をみせて 散るもみぢ

河村孝道氏は次のような注釈をしている。「“裏をみせ” は、一切の恣意的自我性を全て抛却し切って、大自然の儘に一切を任せきった無私のありようを言ったのであり、…⁽¹⁶⁾」と。筆者も『紀要』(第62号)で、良寛の死生観を述べた。良寛にとっては、自分の住む周りの山川草木が己の存在であった。四季の移ろいに死を感得し、そこに帰っていく自己は自然となる。

欧米のキリスト教国における死生観も見てみよう。宇宙の創造主である神の存在は大きい。

デーケン氏は次のように言う、「クリスチャンにとって、死は、意味のない、もはや取り返しのつかぬ終末ではなく、新しき始まりなのである。それ故、聖書は死について、人々にあきらめの念を起こさせるような言葉ではなく、喜びにあふれた表現で語りかける。キリスト教徒は死を常にイエス・キリストの死と復活との関連のうちに見つめる。⁽¹⁷⁾

クリスチャンにとって、死は神のもとに行くことであり、自己はそこに帰って行く。

【注】

- 1 シモヌ・ド・ボーヴォワール 朝吹三吉訳『古い』(上巻・下巻) 2013年人文書院、上巻 230 ページ
- 2 同上、248 ページ
- 3 同上、250 ページ
- 4 同上、251 ページ
- 5 同上、320-321 ページ
- 6 同上、下巻、126-127 ページ
- 7 同上、163 ページ
- 8 同上、314-315 ページ
- 9 同上、315 ページ
- 10 同上、315 ページ
- 11 同上、316 ページ
- 12 同上、316 ページ
- 13 同上、316 ページ
- 14 霜山徳爾「老年期の死生観」(1) 長谷川和夫、霜山徳爾編『老年心理学』1977年、岩崎学術出版社、137 ページ
- 15 大野順一『死生観の誕生』1983年、福武書店、193 ページ
- 16 河村孝道「良寛道人の生死観」「良寛の世界」編『良寛の世界一没後 150 年記念論集』、1978年、大修館書店、151-153 ページ
- 17 長谷川、霜山、前掲書、147 ページ

【参考文献】

- E・キューブラーロス、鈴木晶訳『死ぬ瞬間 死とその過程について』2013年、読売新聞東京本社 上野千鶴子『ボーヴォワール『古い』』2021年、NHK 出版